

平成31年3月13日(水)

老球の細道469号

学業軽視への危惧

会津バスケットボール協会 室井 富仁

最近ある若い指導者のボヤキを聞いた。バスケットボール部員が授業に対する取り組み方が不適切だったので、該当の生徒たちの練習を停止したという。

私も現役コーチ時代は、バスケットボールの練習はもちろんのこと、学校の授業やクラス活動、生徒会行事、学校行事等に対する活動状況なども、バスケットボールと同じように真面目に取り組むことを常に言い続けていた。学業成績でもトップになれなどと無理難題は要求しなかったが、一般の生徒が授業で普通にやっていることは、バスケット部員も普通にやってほしいと思っていた。特に各教科から出される課題レポートなどは、いくら部活動の練習で厳しい状況にあっても、なんとか時間を見つけて期限内にやるべきであると指導した。なぜならば学生の本分は学業だからである。

A高校では教室に各教科課題の提出状況を示す名表が貼ってあった。私は保健の授業や試験監督でクラス教室に立ち寄った時は、必ず自分が指導するバスケットボール部員の提出状況をチェックした。一般に熱心に練習に取り組む選手は授業の課題提出状況も概ね良好であったと記憶している。問題なのは、練習は熱心だが、授業への取り組みが甘い生徒である。このような選手は残念ながら、大事な場面でミスをするが多かった。

辛いことから逃げる、嫌なことから逃げ、やらなければならないことをさぼる習慣は、バスケットボールのコートの中でいざという時にミスとなって顔を出す。バスケットボールの本当の戦いは、自分たちの立場が苦しい時、辛くなった時、厳しい状況の時に通常なされるものであるから。「24時間私は私である」。嫌なことから逃げる習慣は、好きなことにおいてもいざという時に顔を出す。

先日の朝日新聞においても、大学アスリートの学業軽視についての批判が掲載されていた。2020年東京五輪でメダルを狙える選手について、その選手が通う大学の関係者がこぼしていた。いまだにスポーツだけをするために大学に来ていると信じている。

「学業への態度がひどい。欠席する授業も多く、レポートの提出もしないことがあり、多くの先生が単位を与えたくないと話している。まじめに努力すれば卒業できるのに、授業をなめきって競技以外はしようとししない」。

アメリカの大学スポーツは学業にも厳しい。単位が取れなければバスケットボール活動ができなくなる。そんな中で、日本からゴンザガ大学に留学している八村塁選手が今年度のNCAA最優秀選手に贈られる「ジョン・ウッデン賞」の候補にノミネートされているという。ジョン・ウッデンとは「コーチの神様」と言われた元UCLAの伝説のヘッドコーチである。彼が現役時代に選手にいつも言っていた優先順位は、第1に神への信仰、2に家族への愛、3に学業、そして4にバスケットボールだった。

本当に強いチーム、選手は、周囲からも応援され、皆が応援したくなるチーム、選手である。このようなチームの選手たちは何事にも真摯に取り組むので、部活動の顧問からだけでなくクラス担任、教科担任等からもかわいがられ、クラスメートからも信頼される。

「勉強ができないからバスケットボールを頑張る」という時代は終わった。バスケットを通して「何事にも一生懸命がんばる」というガッツを学んでいることを肝に銘じたい。